

カラスの物語

立教大学チャプレン トーマス・プラント



夏の暑い日に近所を歩いている時、私がいっもお肉を買うスーパーの外で、小さな死んだ鳥の死体を啄み、お肉をただで食べるカラスを見かけた。私が近づいたら、カラスは乾いた肉の一切れを嘴にくわえながら空に飛び立ち、スーパーの看板の上にとまった。私がお肉の美味しいものを盗むのではないかと、怪訝な目で私を見た。

今年の夏を含め、毎年東京ではカラスの問題がある。明治神宮前の木の枝から観光客の頭の上にフンを落としたり、バルコニーから洗濯のハンガーを盗んだり、ゴミ箱の中身を出したり、農家の畑を荒らしたりすることが多くある。カラスは利口であり、人間の顔が覚えられ、恨みを長い間抱くとされている。

現在のカラスは評判が良い動物ではないが、昔のカラスは人間に尊敬されていた。日本書紀によると、八咫鳥やたがらすが道を迷っている神武天皇を導くように天照に天から遣わされたとある。また、北ヨーロッパの神話では、オーディンという神が2羽のカラスを召使いとしていた。そして、ネーティブ・アメリカンの伝統では、カラスは死人を天国へ導くと考えられている。

聖書にもカラスに関する話がいくつか出てくる。周知の通り、創世記の洪水の物語によると、ノアは乾燥地を求め、船から一羽の鳩を送った。鳩がオリーブの木の枝を持って帰ったら、ノアは約束された土地が近いと悟った。しかし、鳩を送る前に、カラスを送ることもあった。

ノアのカラスはどこへ行ったのか、聖書では知らされていないが、彼の後継者たちは聖書にまた何度か現れる。ヨルダンの東にあるケリトのほとりに敵から隠れた預言者エリヤ

は、神によって送られたカラスに養われた。霊の世界から遣わされ、死肉を食うその鳥は、天地の国境地帯である荒れ野に暮らしている方に、命を与える栄養を持ってきた。それから、カラスの友であるエリヤ自身も、ある亡くなった子供を生き返らせることができた。

聖書が完成した約600年後に、もう一羽のカラスはノアとオーディンの世界を結ぶことになる。空がカラスの色のように暗い私の祖国イギリスでは、オズワルドという皇太子が生まれた。クリスチャンであったのに、オズワルドはオーディンの子孫のように信じられていた。誕生後、オズワルドは異教徒の僭主によって故郷ノーサンブリアから追放され、現在のスコットランドのアイオナ島にある修道院で修道士に育てられた。そこで、先祖オーディンと同じように、あるカラスをペットにしたと言われている。大人になり、自分の王国を取り戻すと決心し、集まった兵隊の目の前に十字架を立たせ、勝利のために祈るように命じた。神の助けにより、勝利を得て、ノーサンブリアを平和の状態に戻した。

歴史学者聖ビードによると、オズワルド王の治世は長く、恵まれていたのであった。オズワルド王はある聖霊降臨日の宴会で、城の外に貧しい人の群衆があると知らされて、食べ物とその下にあった銀の皿を手に取り、全てをその人々に与えるように命じたことが聖ビードの書物に記載されている。それによると、オズワルドの隣に座っていた修道士聖エイダンがその慈しみ深い出来事を見て、彼の手を祝福した。

しかし、数年後、異教徒部族のペンダ王との戦争で、オズワルドは殺された。ペンダは、オズワルドがキリスト教的な埋葬を受けるこ

とを防ぐように、彼の体を引き裂かせた。しかし、ペンダはオズワルドがカラスの友達であったことを忘れていた。オズワルドのペットであったかどうかはわからないが、あるカラスがオズワルドの祝福された手を嘴に取り、ある木の上に落とす。すると、血が滴り落ちた土から泉が湧き出ると言われている。その木と泉はまだ存在し、オズウェスト(ツ)リー、つまり「オズワルドの木」の町の名前にもなっている。昔のカラスのおかげで、現在でも、神の癒しの力を求める巡礼者がその聖なる水を取りに行くことがある。



聖オズワルドの井戸

オズワルド王の死体を取り返すため、彼の弟オスウィウが自分の命を失う危険があるにもかかわらず、軍を率いて敵地に入った。彼の勇気のおかげで、聖オズワルドの遺体が回収され、聖エイダンに祝福された腕は宗教改革の時までピーターバラ大聖堂で保存され、頭部は今もグラム大聖堂で保存されている。

現在は、さまざまな伝統から伝えられたこれらの物語を可笑しく思ったり、信じ難いと思ったりするかも知れないが、その全てを結びつける糸がある。クリスチャンであった、オスウィウ、オズワルドとその兵隊たちは、永遠の命を得ると信じていたので、自分の民を敵から守ったり、悪と戦ったりできるような勇気を持っていた。預言者エリヤは神の導きに従い、子供を死から解放した。クリスチャンではない伝統にも、神の導きにより、危険から救われることが信じられていた。その導

きとは、世のさまざまな伝統や神話で、カラスに象徴されている。しかし、キリスト・イエスの十字架により、その伝統に隠されていた意味が明らかになる。これらの話を結ぶ糸とは、永遠の命への復活である。

新学期の初めに当たり、皆さんがカラスを見た時に、前と違うように考えてほしい。評判が悪い動物なのに、神様の計画に居場所がある。私たちも、嘴にオリーブの木の枝を持つ純粋の白鳩となる必要はない。汚く、死肉を食う鳥が神に仕えることが可能であれば、罪に汚れた私たちにも可能である。昔の聖人のように神様を信じると、勇気を出したり、悪と戦ったり、食べ物のない人々を養ったりできるような力、つまり十字架の道を歩む力を必ず得るからである。



聖オズワルドとカラス